



ドキュメンタリー映画「珈琲とエンピツ」を発表

今村 彩子監督



「自分から距離をつくっていた…」と話す今村彩子監督＝大阪・十三のシアターセブン

いまむら・あやこ 1979年生まれ。名古屋出身。愛知教育大学卒業。在学中に米留学で映画を学ぶ。これまで12年間ろう者の映像作家としてドキュメンタリー映画を多数制作。CM「伝えたい」がギャラクシー賞選奨作品に。東日本大震災で被災地を訪れ現地のろう者の現状取材して「架け橋」を制作し全国各地で講演・上映活動を展開中。「珈琲とエンピツ」の上映時間の問い合わせは電話06(4862)7733、劇場へ。

ろう者・難聴者を題材にしたドキュメンタリー映画を多く撮っている今村彩子監督の初の長編作品「珈琲とエンピツ」(Studio O.A.Y.A制作・配給)が5月5日から、大阪・十三のシアターセブンで公開される。ろう者のサーファー・太田辰郎さんを描いた作品で「言葉を越えたコミュニケーション」について話を聞いた。

(高橋 聡)

■ハワイの「コーヒー」
「タイトルがとてもいい。静岡県湖西市でサーファーストップ&ハワイアン雑貨店「Surf House Ota」を開いている太田辰郎さんは、サーファーでもあり、サーフボード作りの職人でもある。その太田さんに初めて会った時、とてもおいしいハワイのコーヒーを「ちそう」になった。店のお客さん全部に出すそうで、コーヒーを飲みながら商談、雑談をする。聴者と話す時は筆談でエンピツを使う時が多い。アロハシャツを着た元気なサーファーおじさん。とても元気で明るい普通のおじさん。誰でも気軽に話をして笑顔が絶えない。この人がこんなに元気で明るいのはなぜだろう。素直にそう思って、感動した。12年ずっとろう者のドキュメンタリーを作ってきたいろんな人を見てきたが、こんな人は初めて。私は映画を作りながら自分自身がろう者であることで、不便な生活に対する「怒り」「孤独」な気持ちを制作のエネルギーにしてきたようなところが、虚無感を覚えることも多い。この出会いはショックだった。映画にしたいと申し込んだ時の反応は？

明るさに受けたショック

約1年半カメラを回して、あと半年で編集し69分の作品にまとめた。太田さんとお客さんの会話シーンだけでも70時間分撮った。太田さんはなぜそこまで心を開けるのか。心の変化の表れたシーンを編集で選んで使った。初めは奥さんや家族の方は出ないとおっしゃっていたが、仲良くなるうちに出てくださってお話もしていただいた。奥さんと両親がとても優しい。太田さんの人間的魅力、「人間力」の秘密は家族にあると思った。両親は太田さんが17歳でサーファ―を志願し、その後サーフショップを持つことやサーフボード職人になる夢をかなえるために頑張るのを心からサポートする。「彼は諦めなかった。それで応援できた」と。耳が聞こえないという理由でサーフボード職人の弟子入りも難しかったが、5年前に世界的なサーファーである小室正則さんの門下に入った。笑顔の陰に苦勞も少なくなかった。



太田辰郎さん(右)に話を聞く今村監督

■地球のエネルギー
「今回の作品でナレーションも担当している。私の不完全な発音では批判されるかもしれないと不安だったが、プロのナレーションでは自分の思いが伝わらないのではないかと考えて、自分の声で自分が感じた心の変化を映像に取り込もうと決めた。押し付けるのではなく、あたたかくてユーモアいっぱい太田さんの笑顔と人柄があふれた映画として見てほしいと思った。サーフィンも初体験した。とても楽しく、地球のエネルギーを感じた。サーファー・太田さんの気持ちが少しだけ分かったような気がする。私が映画を撮るのは、ろう者、聴者の区別なく多くの人に「伝えたい」ことがあるから。今それがエネルギーになっていく。次回作は聴者の子供が主人公のテーマを考えている。

人は「伝えたい」思い持つ